

中野北遺跡

2005年3月

大阪府教育委員会

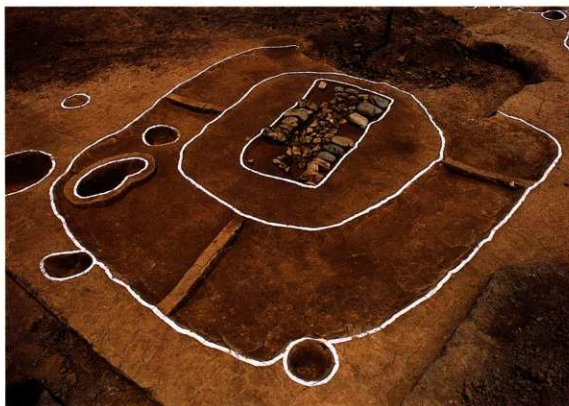
中野北遺跡

2005年3月

大阪府教育委員会



a. 調査区遠景



b. 古墳全景（南東から）

はじめに

中野北遺跡は、富田林市中野町にある旧石器時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、弥生時代の土坑や古墳時代の溝、中世の柱穴などが多数検出されています。

大阪府教育委員会では、主要地方道美原太子線（粟ヶ池工区）道路改良事業に先立ちまして、平成16年度に発掘調査を実施しました。その結果、1辺5mの古墳や奈良時代の溝、中世の畑跡などの遺構が検出され、須恵器や土師器、製塩土器などの遺物が多数出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史に留まらず、日本の古代史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと確信されます。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様並びに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 向井正博

例 言

1. 本書は、主要地方道美原太子線（粟ヶ池工区）道路改良事業に伴い実施した富田林市中野町に所在する中野北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府土木部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。発掘調査は、平成16年度に調査第二グループ主査 西口陽一を担当者として実施した。整理作業は平成16年度に、調査管理グループ技師 林H佐子・藤田道子を担当者として実施した。
3. 本調査の航空写真測量は、南紀航空株式会社に委託した。撮影フィルムは、同社で保管している。
4. 本調査で出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査に際しては、地元自治会、富田林市教育委員会、大阪府富田林土木事務所をはじめ多くの方々にご指導、御助言、御協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。
6. 本書の執筆・編集は西口が行った。
7. 調査、遺物整理、報告書作成に要した経費は、すべて大阪府土木部が負担した。
8. 本書は300部作成し、一冊当たりの単価は544円である。

凡 例

1. 本書に用いた標高はすべてT.P.（東京湾標準潮位）による。座標値は、世界測地系平面直角座標第Ⅵ系によるもので、方位は座標北を示す。

本 文 目 次

はじめに

例言・凡例

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 調査結果	3
第1節 調査方法	3
第2節 遺構と遺物	3
第4章 まとめ	9

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	1
第2図	昭和7年仮製地図による調査区位置図	2
第3図	調査区位置図	3
第4図	遺構平面図	4
第5図	古墳平面図・断面図(縮尺50分の1)	6
第6図	石室平面図・断面図	7
第7図	東半部調査区検出南北溝断面図	8
第8図	出土遺物実測図	9

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	10
-----	---------	----

図 版 目 次

図版1	調査区全景	a, 栗ヶ池全景(上方が北) b, 調査区全景(上方が北)
図版2	調査結果(西半部)	a, ①層下隴溝(南東から) b, ②層下隴溝(南西から) c, ②層下石列検出状況(南から) d, ③層下遺構面検出状況(南東から) e, 石室検出状況(北西から)
図版3	調査結果(西半部)	a, 古墳全景(南東から) b, 石室全景(北西から)
図版4	調査結果(西半部)	a, 石室掘り方全景(南から) b, 土坑1須恵器長頸壺出土状況(南西から) c, 土坑3土師器高杯出土状況(北西から) d, 合わせ口甕棺?検出状況(北西から) e, 南北溝検出状況(南東から)
図版5	調査結果(東半部)	a, 調査区全景(上方が北) b, 調査区全景(西から)

- 図版 6 調査結果 (東半部)
- a, 南北溝検出状況 (南西から)
 - b, 南北溝断面 (北から)
- 図版 7 調査結果 (遺物)
- a, 土坑 1 出土須恵器長頸壺
 - b, 古墳周溝出土ナイフ形石器
 - c, 古墳石室に使われていた砥石 (11)・すり石 (12)
- 図版 8 調査結果 (遺物)
- a, 土坑 3 出土土師器高杯
 - b, 合わせ口甕棺? 鈔釜 (3)・甕 (4)
 - c, 南北溝出土土師器甕 (5)・鈔釜 (6)・須恵器壺 (7)・
製塩土器 (8)・サヌカイト素材礫 (9)

第1章 調査に至る経過

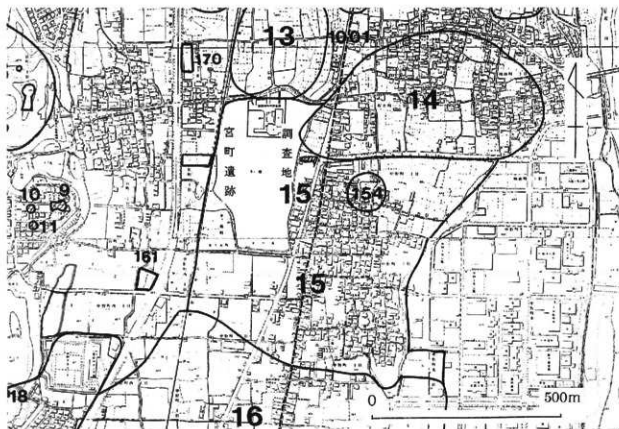
本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府土木部からの依頼を受け、平成16年度に富田林市中野町で実施したものである。

調査原因の道路改良事業とは、一般国道（旧）170号から一般国道（大阪外環状線）までの区間に道路を新設する工事である。工事の実施に先立って、事業主体である大阪府富田林土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、工事区域の確認調査を実施することとした。平成14年3月に行なわれた確認調査では、層厚16～21cmの遺物包含層が確認され、弥生時代のサヌカイト製の石槍、古墳時代の須恵器・土師器、平安時代の土師器などが出土した。

その結果をもとに協議がもたれ、道路改良工事に先立って工事区域全域の本発掘調査を必要とする措置が決まった。

その後、一般国道（旧）170号の中野町3の交差点改良工事が急がれるというので、歩道拡幅部分を平成14年7月に確認調査することとなったが、その部分からは遺構・遺物は検出されなかった。

平成15年11月には、栗ヶ池から大阪外環状線までの部分を試掘することとなった。その試掘調



第1図 周辺遺跡分布図（13・栗ヶ池遺跡、14・桜井遺跡、15・中野北遺跡、16・中野遺跡、154・喜志城跡、161・中野西遺跡、170・栗ヶ池西遺跡、1001東高野街道）

査では、奈良時代の溝・土坑・ピットなどの遺構が検出され、奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層が検出されたため、「宮町遺跡」と命名された。

平成16年5月には、一般国道（旧）170号から粟ヶ池までの部分を発掘調査することとなった。その調査結果を報告するのが、本報告書である。

第2章 遺跡の位置と環境

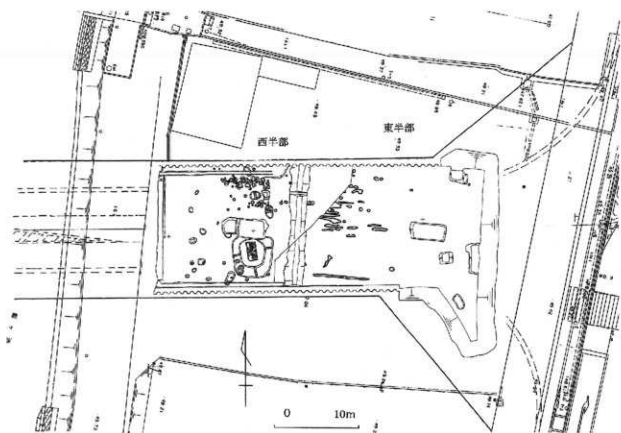
中野北遺跡（第1図15）は、大阪府富田林市中野町、粟ヶ池町に所在する。遺跡の標高は、55～57mで、周囲は、近年に至るまで水田・宅地であった（第2図）。遺跡の立地は、遺跡の東側を北流する石川によって作られたなだらかな中位段丘上にある。遺跡の中央には、南北に東高野街道があり、低い街道西側には粟ヶ池（図版1a）、高い東側には宅地が広がっている。中野北遺跡の範囲は、昭和56年度の大阪府教育委員会による府道美原太子線の発掘調査以降の調査の結果、東西700m、南北700mと判明している。

遺跡の時期は、弥生時代中期に始まり、古墳時代の遺物も出土しているが、中心となるのは中世のものである。

中野北遺跡の周辺には、北に接して桜井遺跡（14）がある。縄文～中世の集落跡で、弥生土器・土師器・瓦器などが出土している。広い中野北遺跡内には、東側に中世城館跡である喜志城跡がある（154）。中野北遺跡の南には、中野遺跡（16）がある。旧石器～中世の集落跡で、弥生土器やサヌカイト製石器が多数出土している。中野北遺跡の北西部には、粟ヶ池遺跡（13）がある。サヌカイトや須恵器が出土している。



第2図 昭和7年仮製地図による調査区位置図



第3図 調査区位置図

第3章 調査結果

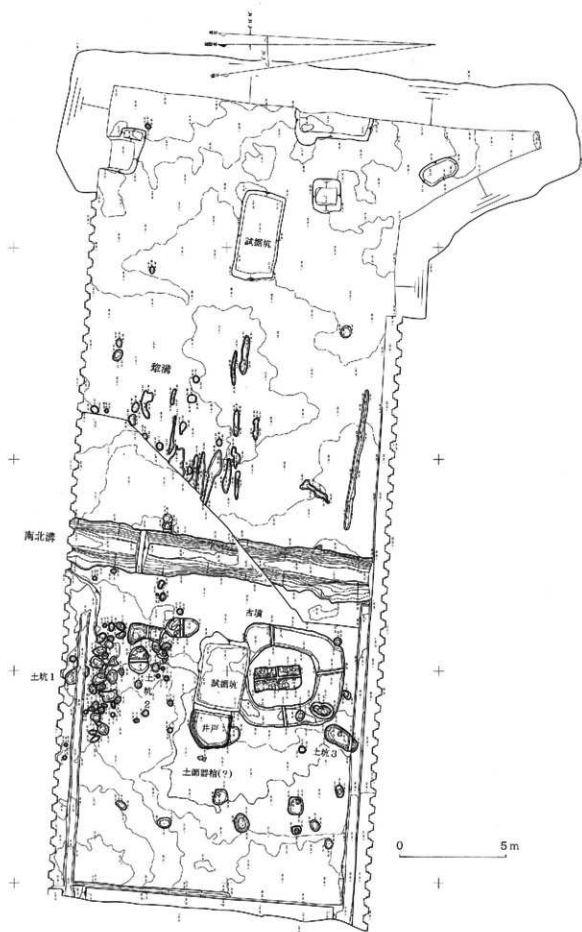
第1節 調査方法

平成14年7月に行なわれた確認調査の結果、一般国道（旧）170号寄りの部分は、発掘調査不要と判断されたため、道路計画のセンターラインNo18が調査区の東限と決まった。西は、粟ヶ池の堤までと決まった。南北端は道路用地までとし、民地に影響を与えないように、その内側に鋼矢板を打って土留処置を施した（図版1b）。

この調査区の範囲内で、現地表面下2.6mまで掘削しなければならなかった。多量の掘削土を場外に搬出できないため、調査区を東西に2分割して掘削土仮置き場を確保しながら、反転調査せざるを得なかった（第3図）。西側から調査開始し、それぞれ人力掘削が終わった段階で、ヘリによる写真測量を行った。

第2節 遺構と遺物

《西半部》 調査区には、厚い新盛土があって、現地表面下2.1mで、旧の耕土層に達する。旧の耕土層の厚さは20cmで、水平に堆積していた。旧の耕土層の下には、床土みtainな遺物包含層である灰褐色粘質土層（①層）がある。厚さ10～25cmあり、縄文～弥生時代のサヌカイト剥片や



第4圖 遺構平面圖

古墳時代の円筒埴輪片の他、瓦器・須恵器・土師器等が、いずれも小片で多数包含されていた。この層を除去すると、南北もしくは東西方向に幾本もの犁溝が検出された（図版2 a）。中世の水田・畑跡と考えられた。

①層の下には、厚さ10～15cmの濃茶褐色粘質土層（②層）があり、奈良時代の須恵器・灰軸陶器・土師器・サヌカイト片が含まれていた。一部に瓦器片や黒色土器片も混じていたので、古代末期～中世にかけての遺物包含層と考えられた。②層を除去すると、南北もしくは、東西方向に幾本もの犁溝が検出された（図版2 b）ので、古代末期～中世の水田・畑跡と考えられた。

西半部調査区の中央には、南北2 m、東西3 mの試掘トレンチの跡があり、その西側に拳大の礫が多数詰まった部分があった。平面形は、一辺2 m程の隅丸方形で、深さ1 m掘削すると、底が出てきた。底は、自然河川の礫層に到達しており、湧水があった。埋土は、灰黄色粘土および拳大の石の入った茶褐色砂礫で、遺物が出土しなかったので、時期不明であるが、形態から素掘りの井戸と考えられた。

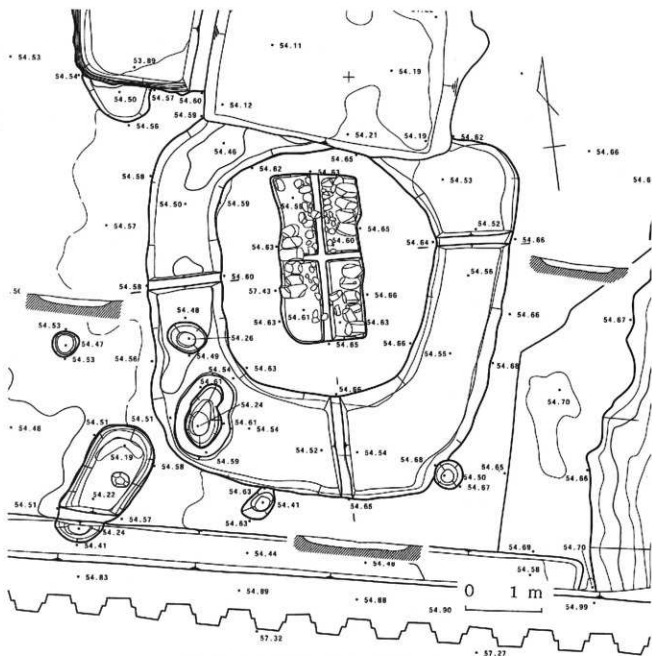
また、この面で、試掘トレンチの南側に、その向きを東西方向にとった石の列が2列、出てきた。掘り方がこの面で見えなかったので、下層のものが、この面に頭を出していると考えられた。暗渠か小型石室ではないかと考えられた（図版2 c）。

②層の下には、調査区西端で、厚さ17cm程の暗灰褐色粘質土層（③層）があり、サヌカイト剥片や初期須恵器の中型壺口縁部片、飛鳥時代の須恵器壺破片がやや固まって出土したり、奈良時代の須恵器・土師器が出土したので、奈良時代の遺物包含層と考えられた。

③層を除去すると、ピットや土坑、古墳、溝などが一面に検出された（第4図、図版2 d）。

井戸の西に接して、土師器が固まって出土した（図版4 d）。土器は、土師器長胴甕および鑄釜破片（図版8 b）で、それぞれの大破片が内面を上にして横たわっていた。両端に焼土が堆積し、屋外竈のような感じがあった。残存状況が良くなく、土器も風化が激しく、合わせ口甕棺の可能性も考えられた。

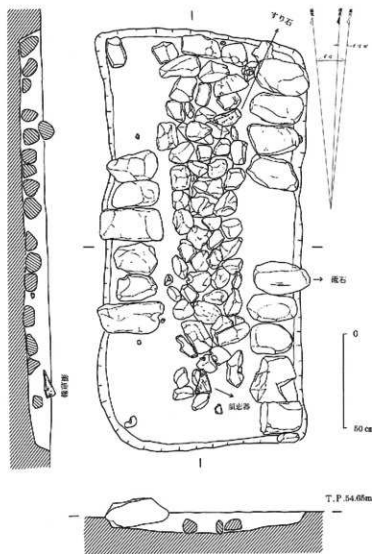
（古墳） 石列は、この面まで下げると、長軸をほぼ北に向けた長方形の掘り方の輪郭が出てきて、小型石室であると分った（第5図、図版2 e）。石室の掘り方は、北側で1.1m、南側で1.2 m、長さ2.25m、やや隅丸の長方形であった。石列は、西側部分は、北西隅に1石、中央部分に6石、残っていた。6石の北側・南側は、後世、抜かれたらしく、残っていない。石列東側部分は、北側に4石、南側に5石残っていた。中央部は、2石ないし3石抜かれていた。石列は、東西共、長さ30cm幅15cm程の長楕円形の石が東西方向に向きを並べて、掘り方上に直接置かれていた。石材は、砂岩や礫岩等で、角の丸い川原石が多かった。西側石列中には、砂岩製砥石（図版7 c）が転用されていた。石材の色や形・岩質などは様々で、手頃な石を急遽並べたという感じである。石列内部を掘削すると、石列は、東西共に底まで1段目部分しか残っていないことが判明した。石列北東隅のみ、石と石が重なっている部分があり、本来は、もう2・3段程は積み上げられていたと推定された。石列の内側に検出された数石は、径が10cm内外のものが多く、幅



第5図 古墳平面図・断面図（縮尺50分の1）

35~50cm、長さ2mにわたって、一面に敷き詰められていた。ただし、石の上面のでこはこは激しく、平坦面を作ろうとする意識はなかったようである。その南端は、後世、抜かれたらしく、石が残存していなかった。その北端は、掘り方の端ぎりぎりにまで敷き詰められていたので、この部分には、石列に使われた大型の石は積まれていないことが推定された（第6図）。

石列の埋土中からは、瓦器碗の細片や奈良時代の土師器杯細片、長さ1cm位の炭片などが出土し、南側の敷石上面からは、5cmほど浮いた状態で、長さ14cmの古墳時代後期頃の須恵器大甕体部片が出土したが、共に、石室の時期を決定するものかどうかについては、不明であった。ただし、想像をたくましくするならば、石列の北側は、石の並べ方が丁寧に密に並べられているのに対し（図版3b）、南側は雑であり、被葬者が北枕に葬られたと考え、足元に須恵器大甕を副葬したとするのならば、この須恵器大甕片が時期決定の資料になる。しかし、石列の石が後世抜かれ



第6図 石室平面図・断面図

土が盛られたものと推定された。

石室の周囲には、周溝があった(図版3 a)。西側・東側で幅1 m、南側で1.3 m、北側は試掘トレンチで削られてしまっていた。溝の埋土は、礫混じりの茶褐色粘質土で、溝の深さは、8～10 cmで、東側の溝中から、旧石器時代のサヌカイト製国府型ナイフ形石器が1点出土した(図版7 b)。周溝の形も隅丸方形で、北側で4.9 m、南側で4.2 mとすぼまっていた。周溝の南北の幅も4.9 mあり、小方墳と考えられた。石室上面には、検出面より、さらに30～40 cm位は、盛土の存在が想定された。

(土坑) 古墳の南西部には、土坑(土坑3)が検出された。平面形は、長さ1.3 m、幅90 cm、深さ38 cmの楕円形で、長軸を北東に向けていた。土坑の輪郭は、北側の幅が90 cmと広く、南側が狭まっていた。土坑の埋土は、灰褐色粘質土で、埋土中層から奈良時代の須恵器杯片が出土した。東側の底に接して、脚部を欠失した土師器高杯が杯面を上にして、出土した(図版4 c)。奈良時代の供献土器と判断された(図版8 a)。

ていることや、瓦器碗も埋土中に入っているので、後世の混入の可能性も捨てきれず、石室の詳細な時期は不明である。

石列内部の敷石中には、長さ15 cm、幅7 cmの直方体のすり石が転用されていた。すり石は、灰色硬質砂岩製のもので、小口に相当する部分がつるつるになるまで使用されていた(図版7 c)。弥生時代後期の朱を作るためのすり石と考えられた。

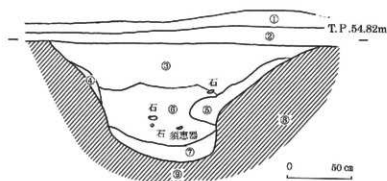
石列内部や敷石上面にも、棺や釘、人骨・副葬品などは一切残存していなかった。石列や敷石を除去すると、掘り方の底は、中央部がやや窪んでおり、検出面からすると、11～12 cmしか残っていなかった(図版4 a)。石列内部の幅と長さを考えると、被葬者は、成人1人で、石列上部には、木蓋が並べられ、

古墳の北側、銅矢板に接して、土坑（土坑1）が検出された。平面形は、楕円形で、長軸を北西に向けていた。土坑の中央部は、調査用の排水路のため、損なわれてしまっていた。長さ75cm、幅65cm、深さ22cmで、埋土は灰褐色粘質土であった。土坑の東側の端に、底に接して、飛鳥時代の須恵器長頸壺の口頸部破片（図版4b）や奈良時代の土師器皿片などが出土した。須恵器長頸壺の体部破片は、調査区西端の③層包含層中に移動していた。この大きな長頸壺は、もとは完形品で、土坑墓の供献土器と判断された（図版7a）。

古墳の北側、土坑1との間に、土坑（土坑2）が検出された。平面形は、楕円形で、長軸を西に向けていた。長さ1.3m、幅95cmで、深さは15cmで、埋土は灰褐色粘質土であった。埋土中から、奈良時代の外面に煤が付着した土師器甕片などが出土した。細片のため、埋土中への混入品と考えられた。

土坑2の東側にも、同規模の土坑が2基南北方向に接して検出されたが、遺物が出土せず、時期不明である。あと、土坑1・2周辺に、小ピットや小土坑が多数検出されたが、埋土中から、旧石器時代の風化したサヌカイト剥片や奈良時代の須恵器・土師器・製塩土器、平安時代中期の土師器碗片などが出土したのみで、何の遺構になるのかは、不明であった。この小ピットや小土坑が古墳の溝埋土上面から掘られているので、逆に、古墳はやはりそれ以前のものと考えられた。

（南北溝） 調査区の東端で、幅2.2m深さ74cmの直線的な溝が検出された。西半部調査区では、長さ10m部分しか掘削できなかった（図版4e）が、東半部の調査でも、5m掘削できた（図版6a）ので、都合15m以上は続くことが明らかな、大きな溝である。断面は、中央部が一段深くなった溝で、段丘礫層をもとせず、掘り抜いている。埋土は、濃茶褐色粘質土層や暗灰褐色粘土層で、奈良時代の須恵器・土師器・製塩土器・サヌカイト素材礫などが出土した（図

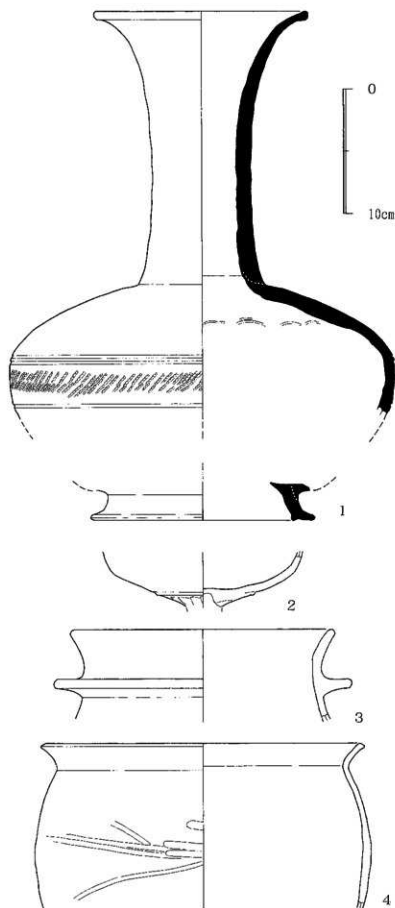


- ① 旧床土（灰褐色粘質土層）
- ② 灰褐色粘質土層（遺物包含層）
- ③ 暗灰茶褐色粘土層（土師器・須恵器包含）
- ④ 灰褐色粘土層
- ⑤ 灰黄褐色粘土層
- ⑥ 暗こげ茶色粘土層（石・土師器・須恵器包含）
- ⑦ 暗灰褐色粘土層（炭・須恵器包含）
- ⑧（地山）黄灰色粘土層
- ⑨（地山）茶褐色砂礫層

第7図 東半部調査区検出南北溝断面図

版8c)。溝底には、厚さ8cmに灰褐色細砂層が堆積しており、流水の痕跡と考えられた。その上層に土器片を含んだ茶褐色粘土がブロック状の固まりで厚く堆積している（図版6b）のは、人の手によって、埋められた結果と考えられた（第7図）。

《東半部》 調査区には、西半部同様、厚い新盛土があって、現地表面下1.9mで、旧の耕土層に達する。旧の耕土層の厚さは、18cmで、水平に堆



第8図 出土遺物実測図

積していた。旧の耕土層中には、近世の磁器や縄文～弥生時代の生駒西麓産の土器片等が含まれていた。旧の耕土層の下には、床土みたいな遺物包含層である暗灰褐色粘質土層（①層）がある。厚さ16cmほどあって、古墳時代後期の須恵器杯身や奈良時代の須恵器杯蓋、平安中期の土師器椀、鎌倉時代の瓦器椀など各時代のものが、いずれも細片で出土した。

①層を除去すると、東西方向に幾本もの犁溝や性格不明なピットが調査区の西半部で、やや固まって検出された（図版5 a）。この犁溝は、西半部調査区の①層下で検出された中世の水田・畑跡と同じものと考えられた。西半部調査区では、その下に、遺構面が何枚もあったが、東半部調査区では、この面が、地山面であった（図版5 b）。調査区南西隅で、西半部調査区で検出された南北溝の続きが検出されたのみで、他に顕著な遺構は検出されなかった。

第4章 まとめ

今回の発掘調査の結果、多数の遺構・遺物が発見された。

1. 西半部調査区で、一辺4.9 mの小方墳が検出された。周

第1表 出土遺物観察表

遺物番号	地区	遺構・層位	種別	器種	時期	流量(cm)		摘要	図	図版
						高さ	幅			
1	西半	土坑1	須恵器	長頸壺	飛鳥	(40.8)	31.0	体部に楊梅き刺突文。	8	7
2	西半	土坑3	土師器	高杯	奈良	(16.0)	(4.3)	脚部欠失。	8	8
3	西半	合わせ口甕棺?	土師器	罎	奈良	(7.5)	23.9	金雲母含有。	8	8
4	西半	合わせ口甕棺?	土師器	甕	奈良	(13.3)	26.9	外面に煤片着。	8	8
5	西半	南北溝	土師器	壺	奈良	(4.0)	(9.7)			8
6	西半	南北溝	土師器	罎	奈良	(3.0)	(3.5)	金雲母含有。		8
7	東半	南北溝(座)	須恵器	壺	奈良	(6.5)	(9.0)	平底。		8
8	西半	南北溝	製埴土器		奈良	(1.7)	(1.8)			8
9	西半	南北溝	石器	素材礫	弥生中期	11.5	5.4	380g。背部は原面。		8
10	西半	古墳東側堀中	石器	ナイフ形石器	旧石器	4.7	1.4	サヌカイト製。4.4g。		7
11	西半	石室中	石器	砥石	不明	35.0	18.0	砂岩製。8.8kg。		7
12	西半	石室中	石器	すり石	弥生後期?	12.4	7.0	砂岩製。850g。		7

溝が巡り、墳丘は後世に削平されてしまっていた。主体部は、小石室で、最下段の石列・敷石のみが残存していた。遺物は、古墳時代後期の須恵器大甕の体部破片が埋葬時の副葬品かと推定されたのみであった。富田林市域の石川左岸の段丘上では、初めての発見例であった。

- 西半部調査区で、飛鳥～奈良時代の土坑墓と推定される土坑が検出された。須恵器長頸壺や土師器高杯などが供献土器であった(第8図)。
- 西半部調査区で、奈良時代の合わせ口甕棺?が検出された(第8図)。
- 西半部調査区・東半部調査区で、奈良時代の南北溝が検出された。この溝の性格については、その方向が真北と合致していることから、条里関連のものかと考えられた。
- 西半部調査区で、古代末期～中世の水田・畑跡が検出された。
- 西半部調査区・東半部調査区で、中世の水田・畑跡が検出された。
- 遺物は、旧石器時代の国府型ナイフ形石器、縄文・弥生時代のサヌカイト剥片、古墳時代の須恵器・土師器・円筒埴輪、奈良時代の須恵器・土師器・灰陶陶器・製埴土器、平安時代の黒色土器・土師器、鎌倉時代の瓦器・土師器・瓦質土器などが出土した。
- 今回、粟ヶ池東堤のすぐ隣接地を調査したが、粟ヶ池築造に関する資料は得られなかった。粟ヶ池は、仁徳天皇の古墳時代あるいは聖武天皇の奈良時代に構築されたものと従来から指摘されてきたが、今回は、堤そのものに調査が及ばなかったため、新知見を得ることができなかった。ただし、調査で発見された南北溝は、奈良時代のもので、粟ヶ池の西堤より西で発見された宮町遺跡は、奈良時代のもので、粟ヶ池に水を入れる深溝水路は、南方2kmの谷川遺跡では、奈良時代のもので発見されていることなどを考え合わせると、池の築造は、水路の築造とも関連し、奈良時代になる可能性が高くなったとは指摘できる。粟ヶ池の水は、下流の羽曳野・藤井寺市域にも延々引かれていくだけに、その重要性は、論を待たないところである。今後の近辺の資料調査・新たな発掘調査の成果を期待したい。

写 真 图 版



a. 栗ヶ池全景 (上方が北)



b. 調査区全景 (上方が北)



a. ①層下壕溝(南東から)



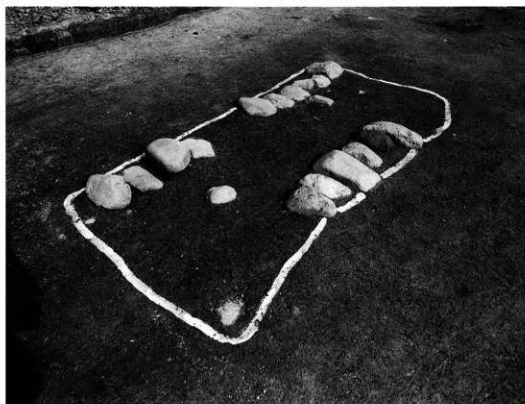
b. ②層下壕溝(南西から)



c. ②層下石列検出状況(南から)



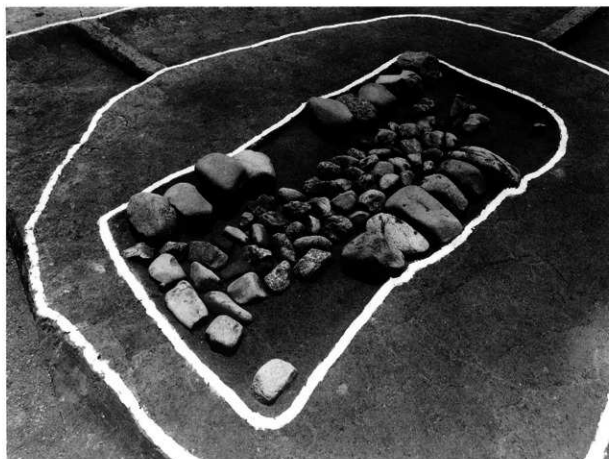
d. ③層下遺構面検出状況(南東から)



e. 石室検出状況(北西から)



a. 古墳全景(南東から)



b. 石室全景(北西から)



a. 石室掘り方全景 (南から)



b. 土坑1須恵器長頸壺出土状況 (南西から)



c. 土坑3土師器高杯出土状況 (北西から)



d. 合わせ口甕棺? 検出状況 (北西から)



e. 南北溝検出状況 (南東から)



a. 調査区全景 (上方が北)



b. 調査区全景 (西から)



a. 南北溝検出状況 (南西から)



b. 南北溝断面 (北から)



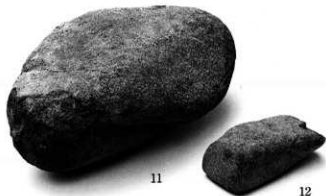
1

a. 土坑1出土須恵器長頸壺



10

b. 古墳周溝出土ナイフ形石器



11

12

c. 古墳石室に使われていた砥石(11)・すり石(12)



2

a. 土坑3出土土師器高杯



4

b. 合わせ口甕棺? 鈿釜(3)・甕(4)



8

5

6

7

9

c. 南北溝出土土師器甕(5)・鈿釜(6)・須恵器壺(7)・製塩土器(8)・サヌカイト素材磚(9)

報告書抄録

ふりがな	なかのきたいせき							
書名	中野北遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2004-6							
編著者名	西口陽一							
発行機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Te.06 (6941) 0351 (代)							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇 〇 ′ 〇 〇 ″	東経 〇 〇 ′ 〇 〇 ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
なかのきたいせき 中野北遺跡	大阪府中野北町 大阪府富田林 市の中野北町3丁目	27214	15	34° 30′ 50″	135° 36′ 40″	平成16年 5月～平成 16年6月	595	主要地方道美原太子線 (粟ヶ池工区) 道路改良 事業に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中野北遺跡	古墳・集落跡	旧石器～中世		古墳、土坑、 ピット、溝、 竪溝		ナイフ形石器、サヌカ イト、須恵器、土師器、 製塩土器、瓦器、白磁、 青磁		小方墳を検出。主体部 は川原石積み <small>の</small> 小型石 室。奈良時代の南北溝 を検出。

大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-6

中野北遺跡

発行	大阪府教育委員会 〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 ℡. 06-6941-0351
発行日	2005年3月31日
印刷	株式会社：中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南2-6-8 ℡. 06-6976-8761

